

をフンフンと上げたりするのは不可能です。

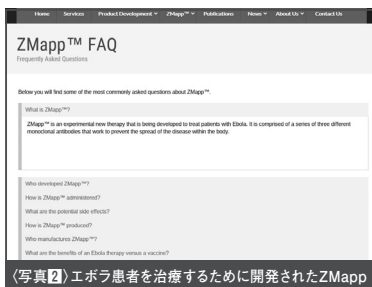
また、ゾンビ化因子が寄生生物だった場合、寄生の目的は自らの生存にほかなりません。宿主と寄生生物は運命共同体なわけで、宿主の命を脅かすような力を発揮させたりはしないのです。

そういう意味ではゾンビを、前述した“他の生物に変化（変態）させる過程の蛹”と捉える設定はスキがありません。異様に強靱な筋肉が育っても、拳が異様な硬度に変化しても人間でない別な生物ということで説明がつけられます。

「でも人間を別の生き物に変化させること自体が荒唐無稽なんじゃ……」との疑問を持つ人もいるでしょう。しかし、意外にも理論上は決して無理な話ではありません。

ウィルスというと普通は「病気の原因となる菌」というイメージを持つでしょう。ですがウィルスは遺伝子の運び屋という性質も有しているのです。植物や細菌では人為的に変異させることに成功しており、実際、人間のインスリンを作る大腸菌やエボラウィルスの抗体を作るタバコなどというものはすでに実用レベル⁹⁾に達しています〈写真2〉。

ただ、動物に関しては研究はなされているものの、現時点で実現しているのは蛍光タンパクの導入程度〈写真3〉。形や性質を大きく変えることは不可能で、人間の拳をコンクリートをぶち破れるように超硬度にする手段などまったく見当もつきません。とはいえ「ウィルスによって



〈写真2〉エボラ患者を治療するために開発されたZMapp



〈写真3〉ブラックライトを当てると光る動物たち
http://agapakis.com/hssp/splicing.html

9) 『バイオハザード』の回復アイテムとして馴染みのハーブの類いは、こうした抗体植物なのかもしれない。